

日蓮『注法華經』における『授決集』注記の特性について

関 戸 堯 海

はじめに

日蓮（一二三三―八二）は、智証大師円珍（八一四―八九二）を比叡山の密教化を推進した人物として、慈覚大師円仁（七九四―八六四）とともに厳しく批判している。『授決集』二巻は、叙によると弟子良勇の永年の随身の功に報いるため、中国天台宗九世の良諳からの所伝及び年来の覚書の中から抽出して五十四件にまとめ、元慶八年（八八四）二月二十三日（円珍七十一歳）に授けたという。「天台の大綱の決」では化法四教は綱目であって大綱ではなく、頓漸円が大綱であるとし、「法華を八教中の円教に摂せざるの決」では超八醍醐論を示すなどの教学的な特色を持つ。また、三井門流に秘伝された天台法華宗伝法の印信と称されたという。（『国訳一切経』和漢撰述部十七 諸宗部十六「解題」大久保良順などを参照）一方で、光謙の『大戒決疑彈妄録』には偽撰説が提示されており、日蓮は『大日経指帰』と『授決集』の教判の矛盾点を指摘して

いる。

日蓮の『注法華經』（玉沢妙法華寺藏）においては、『授決集』を開経『無量義經』・『法華經』序品・二巻紙背・三巻紙背・涌出品・六巻紙背・結経などに、全文または大部分を注記しており、短文の注記例は多くある。そこで、本稿では『注法華經』における『授決集』注記の特性について検討し、日蓮の『授決集』受容の一面について論じたい。

日蓮の円珍に対する評価

日蓮は円仁と円珍を連記・併称することが多く、比叡山にありながら心は天台・妙楽・伝教の本意に背いて、比叡山の密教化を推進した人物と評している。（浅井円道「智証大師円珍」『上古日本天台本門思想史』平楽寺書店、一九七五年、三七五頁。小松邦彰「日蓮聖人の智証大師観」『印度学仏教学研究』十三卷一号、一九六五年等を参照）

正元二年（一二六〇）の『像法決疑經等要文』に『授決集』

の爾前円論を引用し（定二二七三・二二七五頁・真蹟現存）、四月に正元から改元した文応元年（一二六〇）五月二十八日の『唱法華題目鈔』（定二〇一頁）には円珍『授決集』の爾前円論を紹介している。そして、文応元年七月十六日に前執権の北条時頼に奏進された『立正安国論』には「よつて伝教・義真・慈覚・智証等、或は万里の波濤を渉りて渡せしところの聖教、或は一朝の山川を回りて崇むるところの仏像、もしくは高山の巔に華界を建ててもつて安置し、もしくは深谷の底に蓮宮を起てもつて崇重す」（定二二六頁・真蹟現存・原漢文）とあり、初期には『授決集』を珍重していたことがわかる。それが、佐渡配流以降は否定的な態度へと転換していくという特徴がある。

建治二年（一二七六）の『報恩抄』には「智証大師は本朝にしては、義真和尚・円澄大師・別当・慈覚等の弟子なり。顕密の二道は大体此国にして学し給いけり。天台・真言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給けるか。去ぬる仁寿二年に御入唐、漢土にしては真言宗は法全・元政等にならばせ給い、大体大日経と法華経とは理同事勝、慈覚の義のごとし。天台宗は良諤和尚にならひ給ふ。真言・天台の勝劣、大日経は華嚴・法華等には及ばず等云云。七年が間漢土に経て、去ぬる貞観元年五月十七日御帰朝。大日経の旨帰に云く（『注法華経』（結経六三）『正蔵』五八卷一九頁）法華尚及ばず況や

自余の教をや等云云。此釈は法華経は大日経には劣る等云云。又授決集に云く（結経六二）『正蔵』七四卷三〇九頁a）真言禅門乃至若し華嚴・法華・涅槃等の経に望むれば是れ摂引門なり等云云。普賢経の記・論の記に云く、同じ等云云。（定一二三～四頁・真蹟曾存・断簡現存）とある。

円珍の教学について、『大日経』と『法華経』とは理同事勝であるとし、慈覚大師の考えと同じで、天台宗については良諤和尚に習い、真言と天台との勝劣は、『大日経』は『華嚴経』や『法華経』などには及ばないとすると述べる。そして、『大日経旨帰』には「『大日経』には『法華経』は及ばない。ましてそのほかの教えはなおさらである」とあり、『授決集』には「真言や禅宗などは『華嚴経』『法華経』『涅槃経』などの經典に比べれば、真実の教えに誘引するため方便の教えである」とあるとして、『大日経指帰』と『授決集』の判断の矛盾点を指摘している。この『大日経指帰』『授決集』の引用は『注法華経』の結経に注記がみられる。また、円珍と円仁の教学の明確な相違点について日蓮が言及していないのも特徴である。

建治三年（一二七七）の『四信五品鈔』には「中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、天台・伝教の善知識に違背して、心無畏・不空等の悪友に遷れり」（定二二九六頁・真蹟現存・原漢文）とあって、中古の天台宗の円仁・円珍は天台大師・伝

日蓮『注法華經』における『授決集』注記の特性について（関戸）

教大師の善知識にそむいて、心は真言宗の善無畏・不空の悪友にうつってしまったと述べ、否定的な態度を示す。

『授決集』からの長文の注記

『注法華經』二卷・三卷・結經の紙背と、涌出品・『觀普賢經』の行間には、以下のような『授決集』の各件について、ほぼ全文を注記している（二卷一三四）など、中略される部分も多少ある。『授決集』に限らず、紙背には余白を充分に利用した長文の注記が多いのも『注法華經』の特徴である。『授決集』における円珍の見解を参照するために、必要な章節（全文）を注記しておいたと推測できる。ことには、日蓮は仏滅年代の典拠として『周書異記』を重視しているが、『結經一二三』の文中では『周書異記』に言及しつつ積尊入滅について論じられており、注目すべき課題である。（北川前肇『日蓮教学研究』平楽寺書店、一九八七年、一八九頁参照。『注法華經』の注記は山中喜八『定本注法華經』一九八〇年・法蔵館に拠り「卷数・番号」で表記した。また日蓮宗現代宗教研究所のデータベース等を参照）

【紙背】（二卷一三四）五味の決 三（『正蔵』七四卷二八三頁b）

（三卷一九七）中觀唯識學及び諸の輿論の者を教誡するの決 卅五（五十三）（同三〇九頁b）

（三卷一九八）論の未は不なりといえるの決 廿（三十八）（同三〇三頁c）

（三卷一九九）方等已前の般若の決（五十五）（同三一〇頁b）

（結經一〇〇）六即位の仏の決 卅六（五十四）（同三一〇頁a）

a)

（結經一二三）却後三月の決 三（三十一）（同二九七頁c）

【涌出品の行間】（六卷一一七）便に次品の父少子老の義を示すの決（同二九四頁c）

【『觀普賢經』の行間】（結經一四）他學に徴するの決 卅四（五十二）（同三〇九頁a）

尊通（一四二七—一五一六）の『扶老鈔』によれば、『授決集』には「草本一卷（天台大綱決・六即位決を欠く）親筆本」「清書本二卷 親筆本」「悟忍阿闍梨本 二卷」があったとされるが、『注法華經』の注記は元仁二年（一二二五）兵部卿阿闍梨書写の金沢文庫本（上巻欠）に近い古型を伝えている。ここに挙げた長文の注記を原典と照合すると、「三卷一九七」「卅五」「三卷一九八」「廿」「結經一四」「卅四」「結經一〇〇」「卅六」「結經一二三」「三」とあるのは、兵部卿阿闍梨書写本の表記と同じである。また、件末に付加された一段下げの部分は、兵部卿阿闍梨書写本にはほとんどないが、『注法華經』も同様なものとなっている。（二卷一三四）（三卷一九八）を参照）

『無量義經』の歴劫修行と『華嚴經』

『注法華經』の開經における『授決集』の注記は『無量義經』の「四十余年未顕真実」「歴劫修行」(説法品)などの内容と関連していると考えられる場合が多い。また『授決集』所引の澄観『華嚴經疏』と、澄観がさらにそれを詳しく解説した『華嚴經隨疏演義鈔』(徳行品・『授決集』「華嚴の円教歴別を兼ねるの決」)などが注記されており、開經の所説に関連して『華嚴經』と『法華經』の相違について検討するために、日蓮が円珍の見解を参照していると推測できる。文永九年(一二七二)の『八宗違目鈔』に「華嚴宗に十界互具一念三千を立ること澄観の疏にこれあり」(定五二七頁・真蹟現存)と『華嚴經疏』に言及している。

『注法華經』開經の徳行品の行間に〔開經一一〕『華嚴經隨疏演義鈔』〔開經一二〕『華嚴經疏』〔開經二五〕『華嚴經隨疏演義鈔』が注記され、説法品には〔開經五五〕〔開經六五〕『授決集』より注記されるが、これらは『授決集』「華嚴の円教歴別を兼ねるの決」にみえる。ことには〔開經五五〕『授決集』は「四十余年未顕真実」の経文の近辺に注記され、また〔開經六五〕『授決集』は「次説方等十二部經摩訶般若華嚴海空宣説菩薩歴劫修行」の経文の近辺に注記されており、前後の他の注記とも関連していると考えられる。それらの注記は次

のようである。

〔開經一一〕澄観華嚴疏に云く(『授決集』所出)。彼に諸經を判じて花嚴は兼と云い、別教を兼ねと謂うを以て、是れ則ち其の行布に迷いて謂いて別教と爲し、但だ円融を取て以て円教と爲せり。離して二教を成じ、各一辺を失す。合して融通すれば方に了義を成じ花嚴宗に順ず。行布円融互に相摂するに由るが故に。前に行位の中に弁ずるが如し。若し与えていはゞ則ち名異に義同じなるが故に大過無し。若し奪いていはゞ則ち花嚴の本意を失す。故に今取らずと。(『正蔵』三六卷五一頁b・七四卷二九一頁c)

〔開經一二〕又云く。凡そ三乗教は地前は行布、地上は円融なり。今の一乗教の地前は円融地上は行布なり。(『正蔵』三五卷七三五頁c・七四卷二九一頁c)

〔開經二五〕授決集に云く。待説所因と云える切に意を会す須し。何ぞ一代赴教の初の經と爲さざらんや。(『正蔵』七四卷二九一頁c。なお〔開經二六〕は『華嚴經隨疏演義鈔』『正蔵』三六卷六〇頁bの注記となっている)

〔開經五五〕授決集の下に云く。未顕真実の唱え何を以てか寂場の始説を籠めざらんや。(『正蔵』七四卷二九二頁a)

〔開經六五〕授決集に云く。収集の日已に宣説歴劫修行と言ふ。彼の經の所説の法門は即ち是れ無量の四諦門なり。恒沙の法正しくはれ別教の菩薩の所学の道なり。(同二九二頁b)

また、『唱法華題目鈔』には「日本に二義あり。園城寺には智証大師の釈より起て、爾前の円を嫌ふと云い、山門には嫌はずと云う」(二〇一頁)と円珍の爾前円論を紹介しているが、その論拠と考えられる『授決集』「法華を八教中の円教に摂せざるの決」からの次のような注記が『注法華經』開經

日蓮『注法華經』における『授決集』注記の特性について（関戸）

（十功德品）にある。

〔開經一・二三〕授決集に云く。法花を八教中の円教に摂せざるの決なり。絶えて八教の摂に非ず。既に頓漸の外に出ずと言う。請う竟の字を觀ぜよ。何を以て之を觀ぜざる。出外の円を將て頓漸の内に入れんや。（『正藏』七四卷二八四頁b）

〔開經一・四〕又云く。台山の兩答未だ宗意を究めず。（同二八四頁c）

「如是我聞」との関連

『注法華經』序品の冒頭の「如是我聞」の近辺に、以下のような『授決集』「經首の如是の決」からの注記がある。『法華經』の經文の内容と、注記の要文とが直接関係していると思われる好例である。日蓮が円珍の見解を参考としていることが、よくわかる。（拙著『日蓮聖人注法華經の研究』山喜房仏書林、二〇〇三年、五十二頁を参照されたい）

〔一卷一二〕授決集に云く。弟子今仏の後に在りて師の説を結集す。所以に意義師の所説を指して如是と為すなり。是くの如きの事とは、我が所聞の如し。宝勝仏の三周の説を指して、如是○意は前の事に在り。故に且らく此くの如し。須らく知るべし。首の文の義に依ることを。（『正藏』七四卷二九六頁a）

〔一卷二三〕授決集に云く。通序とは後に在て之を置く。別序とは經の前に在るなり。又通をば阿難序と名づけ、別をば如来序と名づく。○只弟子の序は滅度の後に在り、師主の序は現前に在り。二序俱に師主の正説を叙す。故に天台釈すらく、如是とは所聞の

法の体なり。即ち仏の在世阿難の聞く所なり。此の經の迹本二門の開權顯実を名づけて法体と為す。（同二九六頁a）

〔一卷一四〕又云く。或いは云く。梵來の初首には經の題を置かず、末後に之有り。若し首題を指して如是と為せば義終に成ぜずと。且らく爾る可きに似たれども究めて之を言はゞ汝終に成ぜず。漢地の經論には一切初の題無かるべし。梵本に違いて初めに置くが故に。若し初首を許さば我が義至て牢し。○或云。梵經の初首に題無し云云。（同二九六頁a）

弥勒菩薩の疑念

『法華經』の会座にあつた弥勒菩薩は放光瑞を見て、諸の世界の諸仏の説法の次第を述べて、文殊菩薩にその理由を問いかける。これを發端にして、いよいよ『法華經』の説法が開幕する。そして、從地涌出品では、大地の下の虚空から、六万恒河沙もの地涌の菩薩が出現するという、不思議な光景が展開される。その不思議な光景はどのような「ゆかり」によるのか。そのような疑念を懷いた聴衆を代表する、弥勒菩薩の疑念によって、如来寿量品では五百億塵点劫の釈尊の永遠性が明らかにされる。『注法華經』涌出品では、『授決集』の「便に次品の父少子老の義を示す」から次のようなまとまつた注記があり、弥勒菩薩の疑念に関連して日蓮が円珍の見解を参考としていたと推測できる。『開目抄』（定五五一頁・真蹟曾存）『觀心本尊抄』（定七一六頁・真蹟現存）などに示され

るように、弥勒菩薩が地涌菩薩の出現の因縁を問いかけて、釈尊の永遠性が説き明かされていくことを、日蓮が重視していたことは言うまでもない。なお、『開目抄』には、『涅槃經』の「依法不依人」に関連して『十住毘婆沙論』『法華玄義』『法華秀句』とともに、「円珍智証大師云く、文に依つて伝うべし等云云」（定五八四頁・真蹟會存）と『授決集』「便に次品の父少子老の義を示す」で円珍が「教えは、經文によつて伝えねばならない」と述べる一節を引用している（五卷一一九）。

〔五卷一一三〕授決集に云く。始めて我身を見て○已に四十余年を過ぐと○我実に○未だ顕本せざるの前乃至初成皆是れ始見なり。本を顕して已後方に今見と名づく。（『正藏』七四卷二九五頁a）

〔五卷一一五〕授決集に云く。凡そ法華の迹門已前華嚴の初成より已来並に是れ父小なり。始めて四十余年を過ぎたるが故に寿量に本を顕せば則ち父大だ老たり。久しく道を成じたるが故に。今見昔に異なること言はずして知るべし。（同二九五頁a）

〔五卷一一八〕授決集に云く。四味の諸經に未だ會て顕はに説かず。法華の迹門にも猶未だ之を説かず。地より涌出するを待て爾して乃ち之を顕す。斯の事前の經に絶して説ける文無し。若し前に已に有らば其の文を出す合し。又補処識る合し。何を以てか一人を相識らざるや。（同二九五頁a）

〔五卷一一九〕又云く。文に拠て伝う可し。己が父国王に勝ると執すること莫れ。又他に劣ると謂う莫れ。然も家々の尊勝、国々の高貴、大小尊卑各分齊有り。土を以て金と為さば家々に之有り。金を以て金と為さば有無処を異にす。久成の本、開權の妙は法華

独り妙にして独り勝る。強いて之を抑え喪し仏説を更塞す。如来を咎む合くして伝うる者を非すること莫れ。弥勒世界を計するに其の数を知ることなきこと他に文有りや。地涌の虚空に満てる亦之を相識らざること更に何れの典に出でたるや。華嚴を読まずんば仏の富めるを知ること莫く。法華を学ばざれば仏の寿を知ることなし。（同二九五頁b）

〔五卷一二〇〕又云く。或る華嚴の師、華嚴を以て一代の初教と為さざるは大いに法華・華嚴・大經の文に迷へり。信ず可きに足らざるなり。（同二九五頁b）

〔五卷二二四〕（紙背）集の上に云く。便に次品の父少子老の義を示す。天台大師十五遍一切經を読み。古華嚴に至りて特に功力を致し、別して礼文を制して日々に之を行ず。円教の義更に間然無し。今事の異りを弁ずるに円融を争はず。父は二十五、子は百歳、此れを釈するに十義あり。一には始見・今見の異乃至十には根利なるは初めに熟し、根鈍なるは後に熟す。初成道の時を始見と名づけ、法華の座席に久しくして後に真実なるを今見と名づく。上に云く、仏道場に坐して得る所の妙法と。又云く、我始めて道場に坐すと。華嚴に云く、菩提場に坐して始めて正覺を成ずと。涌出品に云く、始めて我身を見て如来の慧に入る。乃至道を成じて已に四十余年を過ぐと。これ此くの如し。例して皆始見と名く。一切皆謂へり。釈宮を出でて、城を去ること遠からず道場に坐して三菩提を得。是れを始見と名づく。我実に成仏してより已来劫数不可思議なりとは即ち今見なりと。大にして之を言はゞ未だ顕本せざるの前乃至初成皆是れ始見なり。本を顕して已後方に今見と名づく。凡そ法華の迹門已前華嚴の初成より已来、並に是れ父小なり。始めて四十余年を過ぎたるが故に寿量に本を顕せば則ち父大だ老たり。久しく道を成じたるが故に。今見昔に異なること言

日蓮『注法華經』における『授決集』注記の特性について（関戸）

はずして知るべし。則ち父太だ老たるは迹に即して本なること寿量に方に談ず。本に即するの迹は具に今説に在り。迹に非ず。（同二九四頁c）

おわりに

このように、『注法華經』の注記の特徴によって、日蓮が円珍の見解を参考としていたことがわかる。日蓮は『授決集』『他学に徴するの決』を中心にして、『大日經指帰』との矛盾点を指摘するが（『報恩抄』定一二一四頁・真蹟曾存・断簡現存など）、『他学に徴するの決』からの注記が結経にみられるなど、関連性を示す記入例が『注法華經』に散見される。これらのことによって、日蓮は円珍を、比叡山にありながら心は天台・妙楽・伝教の本意に背いて、比叡山の密教化を推進した人物と批判している一方で、初期には『授決集』を珍重しているという特徴を再確認できたと考える。なお、『周書異記』をめぐる結経の注記という重要な課題については、未来記に関する他の注記と併せて別の機会に論じたい。

〈キーワード〉 日蓮、『注法華經』、円珍、『授決集』

（立正大学日蓮教学研究研究所研究員・文博）

新刊紹介

静 慈圓

『空海の行動と思想
——上表文と願文の解説から——』

A五版・二八二頁・本体価格二、八〇〇円

法蔵館・二〇〇九年三月